

子どもが動き出す環境設定とは

—「調べて〇〇する」の実践例から—

上越市立高志小学校 教諭 有坂 一郎

1 子どもの姿

こんなことがあった。総合的な学習で「発電所見学」をしたときのことである。午前中は、電力会社の方から実験をしてもらったり、実際に発電所の中を見せてもらったりした。およそ3時間の学習内容である。その後、昼食を食べて近くの川に立ち寄ったとき、ちょうどその日は雪が降っていたので、わずかではあるが積雪があった。この時期に雪は珍しく、子どもは喜んで雪合戦をしたり、川へ雪玉を投げたりしていた。この時間が30分程度である。

学校に戻り、今日の学習について作文を書かせた。提出された作文を読んで私は唖然とした。「発電所の内容が3割、後の7割は雪で遊んだこと」という子どもが少なくないのである。子どもは、心が揺り動かされたことについて作文を書いているのであって、教師が期待したことはおかまいなしなのだ。しかし、これが本来の子どもの姿であろう。

4年生の2学期の国語の小単元では、「調べて〇〇する」といった内容が大変多い。私の使っている教科書では3つもある。しかし、そもそも子どもは調べたいと思って取り組むのであろうか。教師の一方的な押し付けによって、或いは教科書の例を安易に取り入れて「調べさせられている」ということはないだろうか。「〇〇する」段階の前、つまり、子どもが夢中になって調べようと動き出す環境設定をどう整えるか、この点について実践例を挙げて報告したい。

2 実践例

「材料の選び方を考えよう」の単元で、グループで新聞を作って発信するという内容がある。私は以下のように進めた。

- グループでの活動にせず、個人で取り組ませる。
- 1ヶ月の期間を与え、興味ある新聞記事を10個程度集めさせる。
- 集めた新聞記事について、わかったことや理由をメモさせておく。
- 記事やメモを読み返し、情報を整理させる。
- 自分が一番書きたいと思うことについて、新たに自分新聞としてまとめる。

新聞記事を集めることについては、私の方から「今日から1ヶ月の間に、興味のある新聞記事を10個程度集めましょう。」と投げかけた。内容は限定せず、どんな記事でもよいことにした。

およそ1ヶ月後に、記事がどの程度集まったかを確認した。学級の全員の子どもが10個の記事を集めたが、約1/3ほどの子どもは、10個をはるかに上回る記事集めをしていた。その後、記事からわかったことと、その記事を集めようとした理由を作文シートにまとめる時間をとった。

子どもの新聞記事と、書かせたメモを時系列に読んでいくうちに、子どもの学びの姿が何となくであるが見えてきた。整理してみると以下ようになる。

- ①記事集めがばらばらであり、記事の内容もよくわからない。
- ②脈絡のない記事集めが徐々に整理され、自分の好きなもの、興味あるものになっていく。
- ③自分のテーマ(興味あるもの)で記事集めをしている。
- ④自分のテーマ(興味あるもの)で記事集めをしていたが、記事集めを通して、興味・関心を広げ、生活に関連した記事にまで視野を広げたりしている。
- ⑤第一印象(写真や見出し)で記事集めをしていたが、それに関連した社会性のある記事に目を向け始めていく。

はじめは教師から与えられた課題であったが、記事を集めたためていくことで、子ども自身の問題へとなっていた。記事をためることで自分の興味・関心が整理され、自分が本当に書きたい、伝えたい題材は何か焦点付けられていったのである。しかし、これだけでは、先ほど挙げた①の子どもはこの後が続かないであろう。そこで、記事やメモを読み返し、情報を整理させる場が必要になる。つまり自分自身で、記事の内容や自分の取組の変化に気付く場が必要になるのである。その時に書いた作文を紹介する。

【A児】

- ぼくは、一番気にいっているのはロボットの記事です。なぜかという、かっこいいロボットとかわいいロボットがいるからです。2番目にいい記事はネコギギって魚です。長さ10～15cmまでのびて結構大きいです。(中略)…ぼくは、こんなにいっぱい記事を集めてわかったことがすごくあります。いろんなことがわかりました。ぼくは新聞が大好きになりました。また新聞記事を集めたいです。

【B児】

- ぼくが一番好きな記事は「鉄道博物館オープン」という記事です。なぜかという、ぼくは電車が好きだからです。二番目の好きな記事は、「信長の庭」が岐阜県で発見したという記事です。ぼくはなぜこの記事が好きかは、最近、歴史が好きになったからです。ぼくは歴史が好きだから12個の記事のうち、歴史の記事を2個集めました。あと、気にいっている記事は「食品の相次ぐ値上げ」という記事です。ぼくは、なぜかニュースでやっていたりテレビで見たりした記事を、12個のうち3個集めました。ぼくは、最初の方は、小見出しだけで選んでいたけど、最後の方になったら、1回読んでから選びました。ぼくは記事を集め始めてからよく新聞を見るようになりました。あと新聞が好きになりました。

ここまでのステップを踏めば、後は子どもが動き出す。子どもはさらに意欲をもちながら、図書やインターネットで、取り上げた題材について深く調べようと動き出した。A児は、ロボットや魚ではなかったが、集めた記事の中から「メガネラップ」というカニを取り上げた。B児は、歴史に興味をもち始めたようで「織田信長」について調べ始めた。

記事や新たに集めた資料には難語句がかなりあった。しかし、子どもは、辞書を引くことをいとわず、むしろ喜んで活動に取り組んでいた。今まで見られなかった姿である。

3 子どもが動き出す環境設定とは

本実践では、調べる素材について、新聞記事を取り上げた。これが図書(本)であったり、例えば社会科との関連で地域の偉人・文化財であったりしてもよいわけである。しかし、いきなり「興味あることについて調べて新聞を作りましょう。」と投げかけて、どれだけの子どもが動き出せるだろうか。

記事を集めたためていき、ためた情報を整理し自分で意味付ける過程を取り入れることで、学級の全部の子どもが、動き出すことができたのではないかと振り返る。体験活動と同じように、情意面にコトンと落ちたとき、或いは情意面に迫ったときに、子どもは動き出すのではないだろうか。